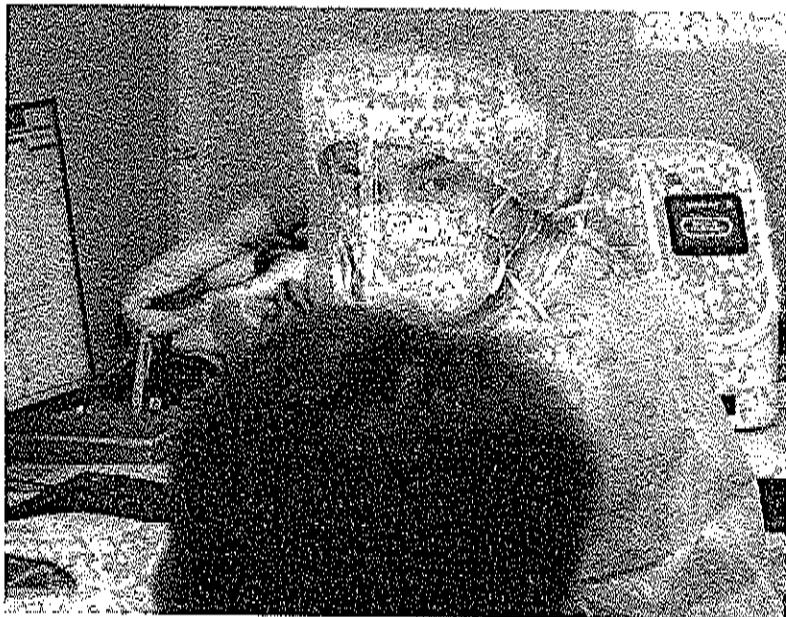


発熱外来 もう限界



発熱外来の患者を診察する医師=3日、中野共立病院

東京・中野共立病院

新型コロナウイルス「オミクロン株」の感染拡大で、発熱外来を受診できなぐ人が続出している。診察数を増やしていくのも増やせない。医療現場はそんな悩みを抱えながら、懸命に対応している。

(小林圭子)

社会
リポート

感染急拡大 診察数増やせない

中野共立病院（東京都中野区）は、約40

0万円かけて発熱外来用のプレハブを設置してしまった。プレハブの外で、一般的の患者と接しない形で待合場所がつくれた。予約をした

人たちが次々に訪れています。その場所で職員は患者が使い終わって椅子やベンチなどを消毒していました。

鳴り続ける電話
発熱外来では朝の電話受け sveが始まるとき同時に電話がかかってきてきます。同病院では、1口当たり10件前後の予約を受け付けます。1口料金の予約は、30分から1時間ほど埋まってしまうといつもいることがあります。その後も電話は鳴り続けます。他の病院を紹介したり、待てるようであれば翌日もまた電話をしてもあります。

外来部長の増田恵子

補助金縮小やめて

発熱外来では朝の電話受け sveが始まるとき同時に電話がかかります。同病院では、1口当たり10件前後の予約を受け付けます。1口料金の予約は、30分から1時間ほど埋まってしまうといつもいることがあります。その後も電話は鳴り続けます。他の病院を紹介したり、待てるようであれば翌日もまた電話をしてもあります。

専門医療施設を

国や都には、発熱外

外来では朝の電話受け sveが始まるとき同時に電話がかかります。同病院では、1口当たり10件前後の予約を受け付けます。1口料金の予約は、30分から1時間ほど埋まってしまうといつもいることがあります。その後も電話は鳴り続けます。他の病院を紹介したり、待てるようであれば翌日もまた電話をしてもあります。

増田さんは「通常業務は変わらないまま発熱外来が追加されて、より大変になった。特に医師の負担はとても大きい」と指摘。「発熱外来をする病院が足りてない」と訴えます。

（全連）さんば、電話の件数は都の発熱する新規感染者数に比例するように増えているといいます。濃厚接触者となつた不安で、発熱がなくても電話をかけてくる人もいます。

医師や看護師は、通常業務のスケジュールを空けて発熱外来を担当します。同病院では、入院や往診、救急は、入院や往診、救急対応もしていきます。同病院では、

（全連）さんば、電話

に発熱外来への補助金を打ち切ったままであります。ほかにも医療機関向けの補助金が縮小されてしまいました。同病院では、感染拡大防止のための補助金は昨年4月で約580万円でしたが、同年10月からは3ヶ月分で10万円になりました。

塚本臨床事務長は、

補助金を受けるためにさまざまな条件があり、小さな医療機関では、適用できる支援事業がほとんどなかつたと指摘します。なんとか受け取った補助金で、受診控えなどによる減収の補てんをしてきました。

（全連）さんば、電話

とをしていくのだけれど、何の根拠も示さず説明もなく打ち切りや縮小されるのはおかしい。最低体制を維持できるよう補助金を継続するべきだ」と憤ります。